

通航一臨見

二

庫文閣内			
二七八	函	三五三	和
一六	架	八一	書
		冊	類
		號	



内閣文庫		
番號	和	35381
冊數	26 (2)	
函號	178	444

男

共廿四



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



周 139

通統一覽表

本邦

日

本邦

通航一覽卷之二

琉球國部二

目錄

一平均始末



通航

覽卷之二

琉球國部二

○平均始末



慶長十回己酉年閏月朔日作日ありて
 山口駿河より島津少将家久及び
 其父宰相入道惟新の書翰紙贈りて
 琉球國平治より八糸府よりありて
 昔紙達紙

慶長十三年己酉年

急度之破止ハ依与去反相沙上諸之儀
付与切之書状中入ハ然ルモ琉球沙動
儀少所少名琉球相遊ハ其々之儀上諸之
儀之儀用之由御説之由本上州取少由
拙者より早之可中入之由同如ハ之儀
公沙中入ハ物又先書如中入ハ質人之儀
早之江成少上之儀尤好ハ從少老中進中入

忠慎清之

慶長十三年

山

後河守

卯月朔日

惠友在判

薩州

少将松

系人之中

尚之琉球之儀其少油以江成少流之儀
奥州松之相遊少尤多好ハ程進与下之

貴意の如し

急度之御上は仍奥州様の上洛に儀付
る先度以書状申入りて然る後琉球の動
儀の御座り有る今も上洛に御用由
御談し与本上州より江中越に傳へて
心付下江成に先の上洛相延於我等珍重
申付下申及し得て琉球に儀に御當一
好む左様の御上被表し拙子急度下江

成り候に御上油の御成り候に尚追ふ
貴意の如し候儀

慶長十年

山口後河守

卯月朔日

並友在判

惟新様

系人の中

貞享松平大隅守書上

同年四月之日是より先高津勢取らる

城墨代連陷し海陸よりをくくは日

子し王城首里シホリと攻破し國王尚寧

之月官以下悉く降系より軍物様山

権九傳平田太郎九傳等尚寧代率向

く二月六日琉球と發し同廿六日薩摩

國日歸陣せり

此征伐の事成記し世間し流布
きりとの琉球征伐記薩琉軍鏡島
津琉球合戦記島津琉球軍精記等致部あり皆輓近の書
してその詳を以てす月日事實とも日家傳の書と
齟齬し殊しく文粉飾しるく位とありしより
之を記載の内家傳正史に於ては説あるり或は薩摩の事

実く照應せらる今一二姑く米用せしもありとの致部乃
書め我が合戦の大畧ハ先之帥ハ島津家久ハ老臣新田武義
とて代島津同姓の家人等致十人總之十萬子八百五十人或ハ
七百六十人八百七十人との長十三年正月廿一日覺府に出陣し
鬼界の島日返れ一日歸島し二月廿日琉球島を岸し
て那覇の東南要溪ヨウケイの要害と破り守り陳文積と撃取同
日佐野常口先登し千里山城と攻む城中ハ益龜靈朱傳説
等居り常口の隊下松尾隼人の廣原の陣と詰り味方頗る死
傷ありこれども常口の飛奮戦し横田嘉助朱傳説と生捕益
龜買ハ自到して諸軍を以て城と抜同七日進之虎竹城と攻り焼
討しるが國王の一族玄國侯李凌若島國一の雪士とせり張
助幡ととも日米念を以て逃る同九日蛇浦の窠門と陥る花房
玄庫の隊士玉澤典左衛門とて公山都師と撃取より松原城と抜
るが武平侯林漢子乃ハ川流子等王都日走る同十一日佐野常口
千里山乃躬成宮人と死と變して王城日向ハ高鳳門とて此狭
石川と緘之を晚狭石門と破りて李凌若志發と撃取事ら

日山より攻りて都市日放火し王城首里に上り日頭
山の城日迫るを王後辰亥能く防ぎ佛く明日降らんといふ
常口これと伝へて陣と退くを夜後辰亥常口の陣と新八味
方奮戦し敵兵新歌川流子中し教多替取しつとも終り
敗れ常口は流士を死に新し新納武彦を八をみて王
城より日頭山と攻圍む王後辰亥玄圃侯李彦長等上下七十三
人と生捕府中と探索し國王公子等成生捕六月十六日
市中より札と建く士卒の狼藉と禁し花船とせしめし
薩摩日流を以高津新伯これと後府に上せしめ國王と
長寄つと上意ありしなり新伯は將也成記し琉球は
遠く武彦を下知しと城代謀焉と入玄圃王以下と世の薩摩
再攻めしと番も其要漢灘し種高大播亮千里の里見大
内務虎竹城の畑勘解由兼倉高し日本之帝左衛門乱蛇浦し
秋月右衛門松原小鈴木内務助都府高鳳門日藤原治部同町
場小花房兵庫王城し松尾隼人横田武左衛門大権田刑部横須
賀左衛門前田十九衛門日頭山日頭山日頭山日頭山日頭山日頭山

蕃ありこれ波致部の手書し載りし月日ハ出陣の外ハ
高津琉球軍精記日の記を但し軍精記し載り不化後日
吳ありそのハハ新納武彦を徴後し琉球し後海し
之地理強弱等成勢察しと内朝しとより征伐の時毎事
便利とゆゑるなり成記しとて家久も後海し要漢灘編し
は波要害しとすしと軍事成勢しとて依野常口都市日
放火せしと四王尚寧大日忠怖し六月十二日の朝妃嬪等
と携し首里城と出く城背日頭山の要害し楯籠るこしれ
お王後辰亥王とと復しと堅くさる同日午刻常口をきて日
頭と攻圍む王後辰亥佛く明朝降らん事成約し常口陣成
山下退しと夜後辰亥襲しと味方敗れ常口ハ後辰亥の才
王瑾し替れ士卒と成死しと家人横田高助ハ國王日頭し逃
れし時途しと王子二人と生捕これと送るし武彦は陣し
しつし武彦はと一万と與り常口と救はしと高助これ成
率ありて連りて款とと城し退入れ王瑾と替取を似し
重創と被り多人の死と哀とて終り自死武彦は八軍とを

く首里城と攻む城く八國王退去の故九將軍晋奉乃虎
竹乱蛇浦より逃きて来りし武平族林賓張助幡等之子餘人
よく堅ちし張助幡等と奮く味方殺傷せしむるの多し
武翁と種島大膳と種島の小筒と張助幡と折しむ
かれ眼と折れし働けし城を獲て武翁と折れしと
く先日津石川より生捕りし武翁の子と城中に放りし
め城と文を乞ふ日頭と攻めし武翁の子と折しむ
くより六月八日國王尚寧く王後辰亥諸官人城と出
武翁と陣門と折れし武翁と折れしと折れしと家
久く尚きし武翁と折れし武翁と折れしと家久先波國成
發し六月廿日薩摩く由緒ある國王と携へ由緒ある
く抗球属和録く波権臣邪那あるとのを畧り誇り邪
覇の海口の鐵錐鐵鎖と張りし堅ちし新細武翁と折
火よりこれと燒解し之と分りし攻めしなり邪那要溪
灘一時敗れし邪那と折れし城を獲り奇策と設け和
とと折れし連戦皆敗れしに少し稍危懼と懐き

佐敷の要害を新く防戦し林漢子邪那と折れし
亡命せし武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
國王く告く邪那殊戮の令と下し王妃養氏邪
那の妹をこれと悲して自殺を國民邪那と怒る追討
王命とて争く新細武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
撰りてし確按し武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
弱きあるの速功ありし武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
國の公戦と詳し記する武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
出塞の節日出し武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
揚白幡新納威武動乾坤平田右将樺山左添得伊川伴衛門
則南浦文集も載りし武翁と折れし武翁と折れし武翁と折れし
推く初日薩州舊傳記し出陣し武翁と折れし武翁と折れし
樺山権左衛門平田太郎左衛門と送別せし武翁と折れし武翁と折れし

首里ノ城日ハ防ヲ戦ハシメテ其ノ城ヲ
城王位降系ハシテ其ノ城ヲ那覇ノ城日ハ矢尻
ノ城ハ防無クシテ其ノ城ヲ一戰日
ノ押寄ラレテ其ノ城ヲ其ノ城ヲ一戰日
不及其城ハシテ其ノ城ヲ其ノ城ヲ一戰日
則早知メテ鹿兒島ノ其ノ城ハ中ノ其
年ハ順風ハシテ其ノ城ヲ其ノ城ヲ一戰日
日滞留シテ翌年尚寧王日列鹿兒島ノ

由陣江波ノ系

按此系日翌年と云ふハ誤
多ク下統と云ふハ誤

慶長十年三月琉球ノ海ノ濤山川ノ中
下之家久トシ出馬ノ下知江波ノ先手琉球
球ノ江波ノ責ヲ一ノ同月中山王居城
首里城日取悉ク其ノ城ヲ中山王尚寧降系ハ同
先手ノ者ノ中山王ト云フ一ノ同六月薩
州ノ列來ハ

以上薩州舊傳記

慶長十四年是年之内我軍衆歸帆時執中山王并三司官来于薩摩
貴久記

島津家久發兵擊琉球前鋒進取北山之地斬首百餘級水陸鼓行並入那霸港中山之兵連戰皆敗王城遂陷尚寧出降師起四十餘日宗社失守兵

南島志

慶長十四年閏月一日家久那霸津日

按此日南島志

大島系記琉球人源流少見是後考考其日那霸港ハ
國ハ西南ノ方ニ薩摩山川港ノ二百里十餘里大島ノ
百二十里徳島ノ六十里あり 此日津ノ人民等

鐵乃々々々と津口日々々々と相戦事之日也

此乃津より恙岸へ相戦事之日也

按此日家久ノ渡海セシニ記ハ多クハ誤リ多ク
此乃津ノ方ニ運天港ノ方ニ前ノ薩州舊橋

記係セ考 騎兵是糧の死するもの致百人は

都乃門日入々々城とせ先破る家日國王之

國の擲ち甚嶮岨より毒蛇多く國民と
しし經歷する事能はば修く彼國めくし
も潔と級けは薩兵是と幻の郷く薩隅二
州の悍徒と撰ひをく柴草と舟日積み
る海濱に運送し上風より火と放ら林叢
山嶽と焼く毒蛇悉く焼死を且一計策
とて薩州より追く兵と散り老弱と
撰ひは致百艘く系と多く旌旗と建く

金鼓と多く進く津口日迫る初めは海岸
一里許と隔く船と停め吏より船と急く進
め一日く又六日町と限り日と経く兵船
多く集る軍勢日く日盛るる琉球めく
此津口と破るは守備と専ら群る禦
く高津の兵を虚と伺ひ精銳の兵と撰ひ
別船を系せ遙く東西の方琉球國の背よ
りおく系しそ海陸共く進み攻む別船

乃兵陸上より小島津の兵を討つたれハ専ら
日進ハ固ハ一戦ハ事三百薩兵も死傷百
餘人トありト雖も前後左右より攻撃多
大日破是琉球ノ王城首里も亦々破れ首
級百級成得國王尚寧降成請ひ之司官以
卜悉く降る久高教く王城とあり子姪妃
妾と捕一是と薩州一告く家久撤書成
紀と後府及び江戸一告く

大之川志

島津琉球と取んと欲はこれと密セ以啓
く兵船軍意の用云影一琉球の商人
薩摩くある者詢く國王より琉球大
漢愕く海色は墨と如く備成役く甚
日波頭穂多の日玉く薩之の老若と聚
教百の海船くのせ旗旌目と奪ひ金鼓
耳と劫く之次来く小攻近つ初ハ海岸

一二里を隔り外に在俄に漕をせしめて
多心と一日日或は八町或は七町に致目
く如き軍勢いよく盛なり琉球國中と
之して皆此日ある薩摩の精銳ハ別
日將舸を家くもるるく東西より出く琉
球の舟の方より取らば是より漕つる明成
治の俄日替々正しく琉球の志を渡り日
去く拒者あり琉球不意と替れ面背乃

款く彼を北く大に潰乱を海よりと艦成
抑く考勢と張り陸地よりと戈と揮く斬劉
縦より一戦く大勝と仰り此より承く属
國よりくく納貢絶は

碎玉話
雑話燭談

くく琉球征伐の事明朝く少ゆる
日より波國よりく色海戒嚴あり

萬曆四十年

按多於く我委長十年ハ波萬曆三十七年
く高橋と記十年と記く多ハ記若乃

得り日本以勁兵三千入琉球國擄其王遷
其宗器大掠而去浙江總兵官楊宗業以聞
令嚴飭海上兵備從之

明史琉球傳

島津家琉球征伐御免と蒙りし事とあり
も密に事終く鹿兒島主外の澁浦よ
り軍影しく引つたぬ又日ありて
打立りし風沙と心琉球人薩列日

有令者急に乞ふに事と告
さるし中山王尚寧大に怒りて
速に部下に知あり又急使と就せ
大明皇帝に奏すしりて明の時令甚
くおとろくうらみあり大に怒りて
うらみ侍従の間遠く有らん閩州廣州
浙江の間薩摩勢先征し日本乃大に
北向し時りて中國の騒動斜りて

近年朝鮮の没終りくるに漸く枕と安ん
むる所又倭寇の多るも薩摩の割を
来るとやうに北朝鮮軍が去返報し有る事
事終り是ハ國家の大難事ありと云ふ上
卜たると恐れ琉球と救ふさうなく只中
義も潔の僉議洋後混乱しと未と相
極し先づ固廣浙江の北と取固しとし
とと義民震い懼れあり

琉球平均の昔少将家久又子より使者
成りて執政の許日没進兵
月日所と
是年

琉球属和録 ○按るる日付書載る所
伝しりしれも姑く明史抄固日存

七月廿日

台徳院殿より御感書と出され同七日
東照宮より如の國と賜る昔北御黒
印成下さる本多依濃も正信本多上
野介正純より返翰あり

慶長十四年四月攝山英傑等より王城
と破り捕利と將る事と家久より家
久より使とせしむ

大権現日言上せしむ

按きふり
右徳院殿に言上は事と後

世々より沙感有く是年と賜りり
此島と家久より下る家

寛永為洋家久藩

慶長十四年四月中山王尚寧藩系仕の旨

家久様より早速

東照宮又ハ

右徳院様へ江仰上り爰沙感斜多し以則
沙感状を琉球國永く家久様へ江仰領
此様の家久様以養父之位入道新伯様家
久様へ以實父宰相入道惟新様へ

西御下様より沙賜江成以代へ江判物

月日薩摩大隅英日向諸縣郡琉球國

按き
ふり

寛永十一年八月廿日及び寛文四年四月六日の沙判物
琉球國十二百之千七百右とあり御代々の沙判物
同様の全可被領北と江州記の沙判物に
薩州舊傳記

薩州舊傳記

慶長十一年四月薩摩之百餘艘琉球へ
渡り波島不及一戦内裏と責島帝王と
捕る御船と則波島津領島中檢
比は島日漸十二百右餘有之

慶長日記
慶長小説

慶長十一年四月國王尚寧降参は昔早
船之中紙の右使者と云被言上り
権櫻標

右徳院標御感不斜則御感状と江下琉
球國と承く家久之江下と名江作出新伯
惟新と同前御感状頂戴仕

至琉球指遣之船不移時日及一戦被黨
致多討捕る割國王降参之工每之司官

以下至于此比不日下为海向之海多識
以至此類働共小於本多依渡者下中比海之

慶長十年

右徳院様

七月廿日

御判

薩摩少将殿

至琉球者越之船波黨致多討捕之殊更
國王及海系之司官以下近日忌岸之類

減以希有之次才小要由本多依渡者
下中比也

慶長十年

右徳院様

七月廿日

御判

島津修理入道との

至琉球者越人致多種日致業討捕之其
上國王就海系近日至之國下为忌岸之

昔尤子雙は合の概本多依渡り可中の
也

慶長十年

右徳院様

七月六日

御中

羽柴之庫入道より

琉球へ織早速届平均し由迄をいし柄
へ候江感思食し即波國進へ糸はは重

等下紙中付し也

慶長十年

権規様

七月七日

御中

薩摩少将より

尚

西洲不極沙威光しる子進江候付し織
糸大菱思しし也要技務はしを又一候し

此仕公共之少産の以上

今度琉球の少人致はるを少又早速は属
少本意國主無之司官以下歴々者共玉
之少國は少少の由少少の級達上少少
少之其比類の事共は成少感少少法書は
少の誠意を少の俄如何と其少少併少少
少之潔儀を拙者一人に托之人慶少少少
少由哀許に長辨山口後少少及少使者可

此所達の條其省畧の忌懼少

慶長十三年

本多依波也

七月五日

正信判

羽柴隆奥少

少

以上

貴札後評是少仍琉球に為少少其人教

江戶海軍の事、大島と中島早速江府付
それより、中島に人致し江府に
交り彼等と昔共出向し付る及一戦則江
府勝利彼等共二三百人江討捕し付
る重る不及交儀彼等相誼をより琉球
の國王江居し向は江多難し交り於彼
地も國王雖江及江一切の敵百人討捕國
王は居城取巻江中し交り頻りに付る

江任に俄國王下城あり下る方は逆殺し
その共江府返如前く有付し國王英之司
官を外頭之共共石連長と下有向朝し由
使者と江江江紙面へ通達達
上聞し交り

大御前極感江思ふ一候し沙機嫌共江府
白事残交り江合共江府江心易可思ふ
誠意ありし中於英國等此於働し手柄不

浅くは許し満ちて芽繁くは則ち球之儀
江を名流許し白流内書江を以て外少実
儀不可也くは流彼北に子流流を可也
成く由少流に流内相留儀江を以て
此表何より相應くは用等少流のく不流
以て公並下象仰く新少可好流儀江何也
下得少流のく流儀江

慶長十年

本多正野介

七月十三日

正純判

羽柴隆奥書札

書報

以上

書札被評是くは仍流球に為りて是くは人教
江を流少何くは流内早速相流則流
球之國主其之司官其外頭之者共江に

連長白河郡了有之由陸奥了友今山流也
江成山何也山紙由一通忍進上少山也
大御下極感江思山一辰之沙撥嫌共山也
白流球之儀相染陸奥了友之江進山也
白則山内書江考之其殘本山仕公山難山間
山公易下思山食山穢流球之儀思山修相融
山自柄山流山主之山滿是之辰山事山好山
山又友之相習儀山山難山何山也相應之

山用等山産山主不江山心並下象作山不
下好跡畧山也惶憐之

慶長十四年 本 上野介

七月十三日 正純判

高津新伯孫

孝報

山

琉球相済中付向使者在成山止せ即
江戸後府に江系返状送る由國之儀に
琉球相済中

上様沙感江成即沙朱平江多し由本
上州より我等方追江中越し目出及儀在
山座の番細志の使志了江御上り書中
不具の旨候儀也

慶長十年

山口後河守

七月廿七日

恵友判

少将托

系人々中

以上貞享鴻洋式於少備書上

同年十二月少将家久及び入道惟新よ
り琉球國代賜りし御謝し物
代獻より日より

東照宮

右徳院殿より御内書と賜り

慶長十三年十二月

権規抄内書

按てりし内書
右徳院殿より賜りし紙

権規抄内書
多しは得たり

琉球早速退治旨先回御付内書

中紙より重く来音特書頁二十字存く

床屋風紙子十端到來紙重く至感悦

是紙本多依後了可申也

慶長十三年

十二月十五日

御判

薩摩守得友

右徳院抄内書

就先發琉球一果より御付内書

中紙より依く太刀一腰馬一疋紙端拾卷

到來欣思念より御細本多依後了可申也

慶長十年年

極月十八日

御判

羽柴之庫入道との

琉球國可江領知く音中せし又親是く辰

尤以依内多位佛草花菜茉莉菜花并硫黄

子自唐屏風志編ちん玕人々巻到来悦思念也

慶長十年年

十二月廿六日

御墨平

薩摩少将との

権規極沙内書

為音信候子十端象牙海南垂鉄砲到来
悦思念也

慶長十年年

十二月廿六日

御平

鴻津之庫入道より

以上

西通く貴札被評見下依今及琉球之儀
以評願江成以付与沙内書江是の事以外聞
実儀亦思即之也江成以より以礼江給上及
思之より在彼國以は重多为了江評付を
上彼國王其妻以同道以よりより了江成

付与奉門之儀以延引江成以由左振以評願
以之礼延之被く由より以使若より江給上
就其為以を佛多此一本茉莉花一本
唐之板廣風每碗黄子斤以之止江成以
如以目錄懸被抄録以之更書路江入以念
旨以評願以の一版沙機揚共より残下以評願
以江合以評願以の以安心思食以別沙内書
江是下就与抄地評願儀其沙評願以之表之

相應し以用等少所成し不江以少並下江
付以不可好跡を以委細し以使者に中
入以名下江中上以心程清之

慶長十四年

本多正野介

十二月廿六日

正純判

羽柴隆興之執

之級

以正貞享松平大隅守書上

慶長十四年十二月十五日高津之庫入道今
度儀球團と賜以謝禮とて使者と以
指紙一沓太刀一搦沙馬一疋端子十卷と
台徳院殿に献以是日迄
台徳院殿より御書とて庫入道に賜以又
同廿六日薩摩少将家久今度儀球團と賜
以謝禮とて使者と後府に指紙一俵草
花より花碗黄白唐扇風白ちん

自注
十卷 成

大神君日献是日修

大神君より御書と家久日賜

家久日記追加
貴久記



